「キンダーの森の種子たちへ」



兵庫大学附属加古川幼稚園長 浅野貴路

「風が抜け 光がさす にぎわいある幼稚園」これは本園のタグラインです。着任から十ヶ月が過ぎた今、つくづく的確な表現であると感心しています。真冬の今は、寺田池方面から冷たい風が容赦なく園庭に吹き込んできます。しかしこどもたちは気にする様子もなく三輪車をこぎ、砂場で砂を触り、思い思いのことに没頭しています。

幼児期における自然環境の持つ意味は大きいといいますが、自然が発する膨大な情報をこどもたちは五感を通して受け止めているのでしょう。森の中で出会う虫たちに命を感じ、草花を摘むことで植物の持つ色彩や感触、匂いを情報として受け取っています。時には優しく「花びらください」と語りかけることも。こうした日々の園生活の中で、こどもたちの心は安らぎ、豊かな感情や好奇心、表現力等の基礎が培われているように感じています。ある時、幼稚園はなぜ「園」というのか気になったので調べてみました。『種子には自分で伸びていく大きな力があり、その力が自然の土の潤いや日光の暖かさに養われながら伸びる。幼稚園という場所は、柔らかく耕された地に種子が撒かれるように子どもがその自ら持つ力で、最も幸せに都合よく伸びていく場所だから。』

(幼児教育学者倉橋惣三)



幼児期の子どもたちには、自分が家族や社会にとってかけがえのない 存在であることを自覚させる(自己肯定感)ことが最優先です。昨今で は、早期に専門的な指導を求められる家庭もありますが、間違っても種 子なるこどもを時ならぬ時に咲かせようとする温室植物にしたり、盆栽

のように早い時期から型にはめて、飾り物にしてはいけないと思いました。

本園のように多くの行事をこなしていくのは大変なものがあります。しかしながら、 収穫した野菜を白いビニール袋に入れて園バスに乗り込む後ろ姿は、「はじめてのおつ かい」で両親のために時には泣きながら家路を急ぐ場面と重なるものがありました。 あまりにも重すぎて地面に擦れて、破けるところまで同じで微笑ましく見送ったもので す。お友だちと共に収穫をし、先生にもらった袋を引きずりながら瞳を輝かせて「今夜 のおかずは・・・」と話す姿は食育にも繋がる、将来の糧となることでしょう。

これから進む義務教育の世界では、小1プロブレム、いじめ、不登校等々、様々な課題に親子で直面することもあるかもしれません。しかしそれは学習課題であって、自分で考え、家族や仲間と協力しながら解決していくことで、親子で共に成長していくのです。子育てが難しいと考える人の中には、先程の盆栽のように自分の思う型にこどもをはめようとしているのかもしれません。

ある意味、こどもの力は大人が考える以上に大きく「わが子が 自分を親にしてくれる」ぐらいの気持ちでいてもいいのかもしれ ないという気持ちになります。

皆さんが卒園しても附属加古川幼稚園は「同園生」として今後 も皆さんの成長を見守って参ります。ご卒園、誠におめでとうございます。